

4-5 熊本県頭地下手遺跡出土の石器石材について

越知 睦和 ※

1 はじめに

ここでは、頭地下手遺跡Ⅳ区から出土した石器石材について、分類と計測を行い、その特徴を析出し、縄文時代におけるチャートの石材原産地及び石器製作址遺跡としての重要性を述べる。

2 対象と方法

頭地下手遺跡Ⅳ区から出土した剥片、碎片、石核、母岩、原石といった製品以外の石器を対象として、その石材を分類、同定し、併せて数量、重量をはかる。その結果を表とグラフにとりまとめ、全体の傾向と各グリッドの状況を示すこととする。

分類、計測した石器石材は、総点数8,713点(Tab.1)、総重量239,477 g (Tab.2)である。これらの石器石材を肉眼観察により、チャート、黒曜石、砂岩、凝灰岩、安山岩、流紋岩、ホルンフェルス、石英、頁岩、粘板岩、片岩系、その他、計12種類に分類し、さらにチャートは12種類、黒曜石は2種類に細分した。

なお、石材の分類は、複数の人員が肉眼観察により実施している。このため、幾許かの誤差が含まれていることをお断りしておきたい。

3 全体の傾向

分類、同定、計数、計量の結果は、石質組成表とそのグラフで示した。

チャートの点数は約7,000点で全体の約80%を占め、その重量は約137kgで全体の約60%である。点数と重量の関係から、1点あたりの重量が比較的小さいということが言える。このことは、チャートには石器製作時に剥離された細かな剥片が多く含まれていることを示している。

チャート以外の石材は、数量、重量ともに各々数パーセントにすぎない。その傾向は多少の変動はあるもののグリッド毎の状況にも言える。出土量の多いC2、D2グリッドでも同様である。ただし、C2、D2グリッドの砂岩は重量がやや多い傾向を示している。これは、頭地下手遺跡の特徴の一つである石錘が多量に出土していることと関係がある、と考えている。礫塊石器である石錘は、素材段階から原石の形状がほとんど変化しないため、点数に対して重量が多くなる傾向を示す。

この他、黒曜石、凝灰岩、安山岩、流紋岩、ホルンフェルス、石英、頁岩、粘板岩、片岩系石材、その他、と種類豊富な石材が認められたが、点数、重量ともに

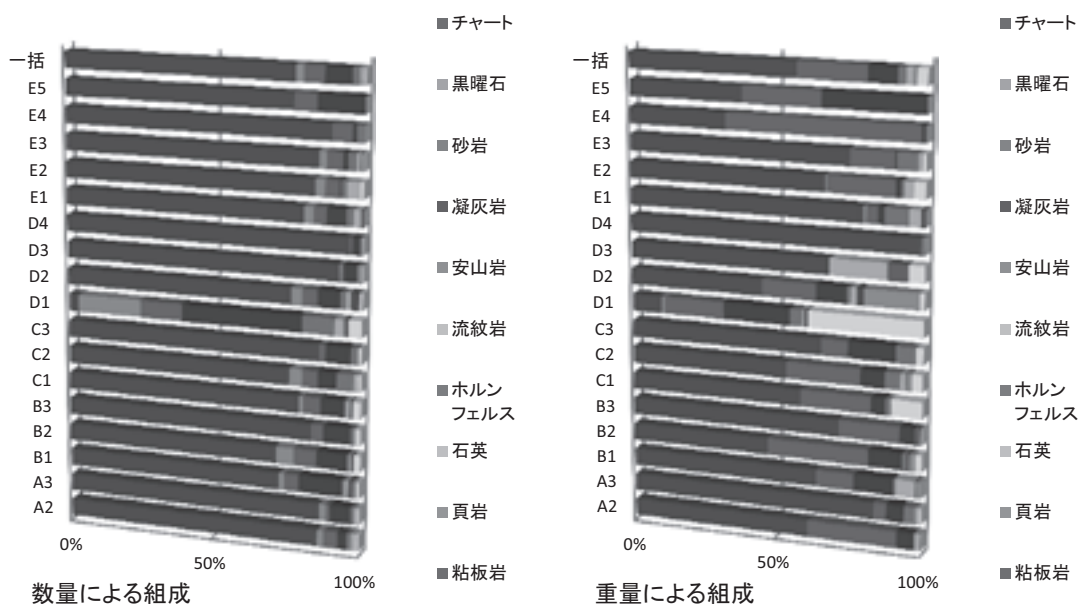


Fig.1 頭地下手遺跡Ⅳ区出土石材の組成

Tab.1 頭地下手遺跡Ⅳ区出土石材 計数一覧

地点	チャート	黒曜石	砂岩	凝灰岩	安山岩	流紋岩	ホルン フェルス	石英	頁岩	粘板岩	片岩系	その他	計（点）
A2	271	7	14	10	5	3	0	1	0	0	1	3	315
A3	449	11	9	35	7	7	0	0	0	0	0	1	519
B1	135	3	9	27	2	2	2	0	0	1	2	2	185
B2	158	13	17	23	1	0	0	1	0	2	1	4	220
B3	179	0	9	19	2	0	1	1	0	0	0	3	214
C1	336	5	25	33	3	2	0	3	0	4	0	11	422
C2	1285	71	89	105	98	13	1	2	1	1	6	16	1688
C3	469	0	12	47	13	2	0	0	0	0	0	4	547
D1	4	24	16	45	12	3	0	0	1	1	0	5	111
D2	1373	62	93	135	34	23	1	0	4	45	6	16	1792
D3	382	2	3	18	3	1	3	0	0	0	0	1	413
D4	568	0	5	15	4	3	0	0	0	0	0	0	595
E1	174	7	9	14	5	5	0	0	0	2	0	0	216
E2	231	8	13	2	5	11	0	0	0	0	0	4	274
E3	440	13	27	9	14	5	0	1	0	4	0	3	516
E4	67	0	5	1	2	0	0	0	0	0	0	0	75
E5	10	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	13
一括	464	15	40	54	13	5	1	1	0	0	3	2	598
計	6995	241	396	594	223	85	9	10	6	60	19	75	8713
%	80.3%	2.8%	4.5%	6.8%	2.6%	1.0%	0.1%	0.1%	0.1%	0.7%	0.2%	0.9%	

わずかである。片岩系石材については緑色片岩、結晶片岩等があり、その他には玄武岩、礫岩、花崗岩、泥岩、石灰岩等が含まれるが、石器石材にはあまり使われないものであり点数も数点にとどまるため、頓雑しないようその他として一括した。

以上の石材のうち、黒曜石以外の石材は遺跡から数十m先の川辺川の河原から採取でき、ほぼ在地の石材として考えてよいと思われる。

4 チャートと黒曜石

次に、チャートと黒曜石について述べる。チャートは最多出土量の在地石材であり、黒曜石は産地推定が可能な搬入石材であるため、頭地下手遺跡における石器石材の特徴を示すと予想したからである。

チャートは、全体の色味と筋のような模様によって12種類に細分した。また、黒曜石は色味によって2種類に細分した。

チャート

白色系：全体的に白いもの。

黒色系：全体的に黒いもの。

灰色系：全体的に灰色のもの。白色系・黒色系と判断が難しいものは灰色系とした。

赤色系：全体的に赤色のもの。いわゆる「赤チャート」。

緑色系：全体的に緑色のもの。

茶色系：全体的に茶色のもの。赤色系と見分けが難しいものもある。

紫色系：全体的に紫色のもの。

灰色系白線：全体が灰色でその中に白色の線（筋）がランダムに入るもの。

灰色系黒線：全体が灰色でその中に黒色の線（筋）がランダムに入るもの。

灰色系赤線：全体が灰色でその中に赤色の線（筋）がランダムに入るもの。

Tab.2 頭地下手遺跡IV区出土石材 計量一覧

地点	チャート	黒曜石	砂岩	凝灰岩	安山岩	流紋岩	ホルン フェルス	石英	頁岩	粘板岩	片岩系	その他	計 (g)
A2	6643	4	3278	639	50	28	0	105	0	0	70	11	10827
A3	5799	12	282	409	284	93	0	0	0	0	0	31	6908
B1	6737	7	1350	1427	58	697	35	0	0	24	155	18	10508
B2	4744	11	3451	1141	167	0	0	1	0	75	203	224	10016
B3	3985	0	1148	290	24	0	79	9	0	0	0	21	5555
C1	7580	5	3087	643	192	20	0	18	0	16	0	1354	12915
C2	26716	112	12222	3988	2537	854	143	13	1	5	866	1860	49318
C3	7061	0	966	1735	726	8	0	0	0	0	0	257	10753
D1	584	58	1145	1295	227	24	0	0	33	58	0	2160	5585
D2	26336	85	10660	5969	853	1008	22	0	105	1439	10653	850	57979
D3	6974	2	11	40	3	2000	711	0	0	0	0	546	10288
D4	6820	0	15	42	96	12	0	0	0	0	0	0	6986
E1	2023	19	100	56	206	96	0	0	0	42	0	0	2542
E2	6004	42	2047	150	100	273	0	0	0	0	0	360	8975
E3	9194	29	1775	54	856	136	0	15	0	21	0	165	12244
E4	637	0	1242	23	10	0	0	0	0	0	0	0	1912
E5	44	0	30	39	0	0	0	0	0	0	0	0	113
一括	9238	65	3655	1559	407	201	24	153	0	0	202	549	16054
計	137117	449	46466	19499	6797	5449	1013	314	139	1679	12149	8407	239477
%	57.3%	0.2%	19.4%	8.1%	2.8%	2.3%	0.4%	0.1%	0.1%	0.7%	5.1%	3.5%	

黒色系黒線：全体が黒色でその中に漆黒の線（筋）がランダムに入るもの。

黒色系白線：全体が黒色でその中に白色の線（筋）がランダムに入るもの。

黒曜石（ob）

黒色系：全体が漆黒色のもの。佐賀県の腰岳産と推定する。

灰色系：全体が灰色のもの。長崎県の針尾産と推定する。

チャートは、灰色系が最も多く全体の約8割を占め、かなりの点数差はあるが黒色系778点、灰色系黒線284点、赤色系169点が続く。その他のチャートは、数点から数十点と少量である。この傾向はグリッド毎でも同様であり、灰色系が相対的に高い割合を占めている。ただし、D1グリッドは灰色系4点と極端に少

なくなり、黒曜石のほうが多い様相を示している。

次に、黒曜石について述べる。多数を占める黒色系の黒曜石は、近隣に産地が確認されていない。最も近い産地は鹿児島県との県境にある日東産黒曜石であるが、不純物が多く入ることが特徴である。頭地下手遺跡でも不純物が入る黒曜石も確認されているが、漆黒色のものがほとんどであり、日東産黒曜石とすることはできない。黒色系の黒曜石は、頭地下手遺跡が縄文時代後期を主とすることを考えれば、この時期に多用される腰岳産黒曜石と考えるのが妥当であろう。なお、わずかであるが灰色系の黒曜石が確認されている。これは前述した長崎県の針尾産の特徴であるが、時期的に旧石器時代に使われる黒曜石であり、本資料が縄文時代後期に属するものかは不明である。

黒色系の黒曜石は233点とその他の石材と比べれば非常に少ないが、産地から遠隔地である本遺跡においてその黒曜石が233点出土しているという事実は熊本県頭地下手遺跡出土の石器石材について 383

Tab.3 頭地下手遺跡Ⅳ区出土 チャート、黒曜石 計数一覧

地点	白色系	黒色系	灰色系	赤色系	緑色系	茶色系	紫色系	灰色 白線	灰色 黒線	灰色 赤線	黒色 黒線	黒色 白線	ob 黒色系	ob 灰色系	計 (点)
A2	1	58	186	1	6	0	0	0	14	0	2	3	7	0	278
A3	24	52	336	0	2	0	0	0	32	0	3	0	11	0	460
B1	3	29	86	3	1	0	0	0	11	0	1	1	3	0	138
B2	0	35	98	5	1	1	0	0	14	0	4	0	13	0	171
B3	5	63	102	5	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	179
C1	3	63	248	10	0	1	0	0	10	0	1	0	2	3	341
C2	2	177	1015	39	1	1	0	1	40	0	9	0	69	2	1356
C3	0	20	425	7	1	0	0	0	13	0	2	1	0	0	469
D1	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22	2	28
D2	7	131	1126	43	0	0	1	1	43	1	15	5	61	1	1435
D3	1	12	356	2	0	1	0	0	10	0	0	0	2	0	384
D4	0	30	501	18	1	0	0	0	16	0	2	0	0	0	568
E1	0	9	150	3	0	1	0	0	11	0	0	0	7	0	181
E2	0	14	189	6	0	2	0	1	18	1	0	0	8	0	239
E3	1	52	326	9	0	10	0	1	35	3	3	0	13	0	453
E4	0	10	52	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	67
E5	0	0	9	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	10
一括	0	22	409	18	0	1	0	0	9	4	1	0	15	0	479
計	47	778	5617	169	13	18	1	4	284	9	43	12	233	8	7236

Tab.4 頭地下手遺跡Ⅳ区出土 チャート、黒曜石 計量一覧

地点	白色系	黒色系	灰色系	赤色系	緑色系	茶色系	紫色系	灰色 白線	灰色 黒線	灰色 赤線	黒色 黒線	黒色 白線	ob 黒色系	ob 灰色系	計 (g)
A2	3	1013	5098	27	167	0	0	0	105	0	20	209	4	0	6647
A3	139	797	3375	0	142	0	0	0	1329	0	17	0	11	0	5810
B1	228	715	4864	31	31	0	0	0	815	0	1	51	7	0	6744
B2	0	638	2727	231	1	6	0	0	967	0	174	0	11	0	4754
B3	61	1937	1703	158	0	0	0	0	115	0	0	12	0	0	3985
C1	41	1213	5682	200	0	9	0	0	431	0	4	0	1	3	7584
C2	7	3009	20671	1038	30	246	0	3	1491	0	220	0	112	1	26828
C3	0	343	5778	306	249	0	0	0	353	0	10	21	0	0	7061
D1	0	60	523	0	0	0	0	0	0	0	0	0	56	2	642
D2	1081	2541	17368	1146	0	0	665	22	1877	17	1203	416	84	1	26421
D3	1	169	6505	53	0	163	0	0	81	0	0	0	2	0	6976
D4	0	611	5772	228	2	0	0	0	197	0	11	0	0	0	6820
E1	0	55	1825	20	0	24	0	0	99	0	0	0	19	0	2042
E2	0	283	4156	1094	0	51	0	161	255	4	0	0	42	0	6045
E3	114	541	6976	130	0	406	0	103	832	49	42	0	29	0	9222
E4	0	175	407	0	0	0	0	0	55	0	0	0	0	0	637
E5	0	0	23	0	0	0	0	0	21	0	0	0	0	0	44
一括	0	430	7498	757	0	13	0	0	503	15	22	0	65	0	9303
計	1674	14532	100953	5419	622	919	665	289	9526	86	1725	709	442	7	137566

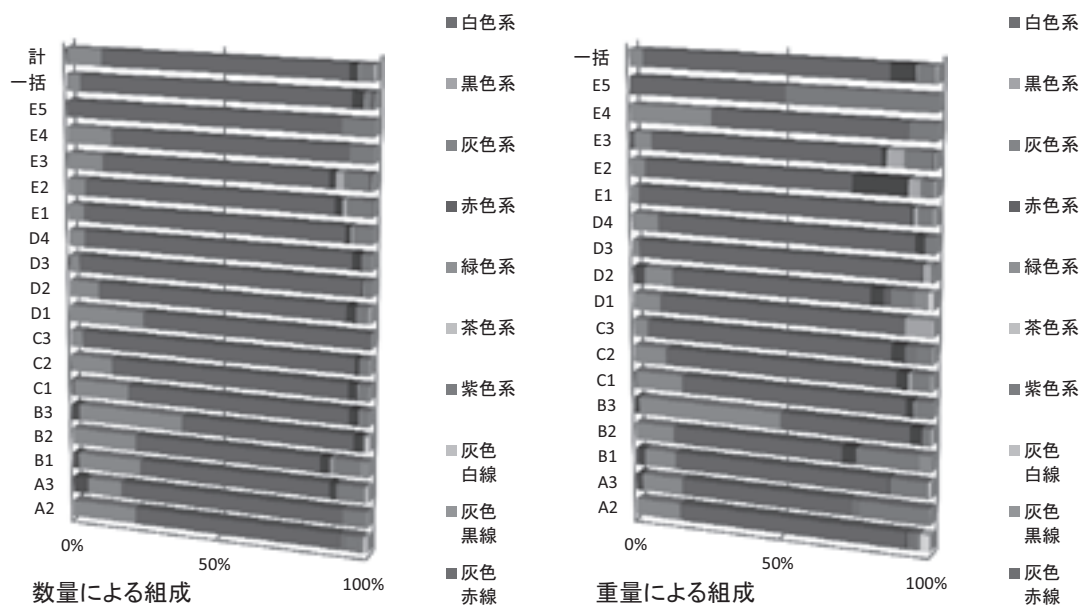


Fig.2 頭地下手遺跡Ⅳ区出土石材の石質組成（チャート）

非常に特徴的である。また、グリッド別の状況においては、チャートと同じく C2 (69 点)、D2 (61 点) グリッドで多く確認されている。しかし例外的な様相も確認されている。D1 グリッドではチャートが 4 点しか出土していないのに対し黒曜石は 24 点出土しており、他のグリッドのようなチャート主体の状況とは異なった様相となっている。

5 頭地下手遺跡の特徴

以上に述べてきたことから、頭地下手遺跡の特徴は以下のとおり取りまとめることができよう。

頭地下手遺跡は、チャートの石材原産地に立地した、チャートを主体とした石器製作址である。頭地下手遺跡から数十 m 下れば、川辺川の河原でチャート転礫が採取できる。したがって、河原石を原石とした石材原産地である可能性が最も高くなるだろうが、周辺地域の露頭調査を加えて詳細に検討することが必要であろう。

また、頭地下手遺跡は、遠隔地の石材である黒曜石

が一定量出土し、かつ、剥片剥離作業の痕跡を認めることができるため、石材流通における主要中継地としての性格もそなえている。

なお、チャート以外の石器石材には、主要な石材として砂岩、凝灰岩、安山岩があり、これにホルンフェルス、石英、頁岩、粘板岩、片岩系石材等が加わり、豊富な種類の在地石材が使用されているという特徴が抽出される。これは、チャートの原産地遺跡でありながら他の石材も使用していることとなり、石器の器種によって石材の使い分けがなされたことを示唆しよう。事実、砂岩は石錘に多用されているのである。

頭地下手遺跡のように、黒曜石以外の石材原産地、石器製作址となる縄文時代の遺跡は、非常に稀有である。今後、頭地下手遺跡で製作されたチャート製石器がどのように流通しているか、探ることが課題であろう。まず、頭地地域、川辺川流域の遺跡出土のチャート製石器を分析することで、その動向は予察することができよう。